

開放制教師教育の周辺

～初等・中等教員養成への所感～

大学行政実務家 山本晴夫

私は教師教育の専門家でも教育史の研究者でもないが、一人の生活者としてこれまでの私や私の子どもの体験をもとに、学校教育と開放制教師教育について感想を述べてみたい。

戦後、師範学校教育に訣別して、自由な学問的精神のもとに開放制教師教育が開始されたと認識している。その当時に教師として勤務していた方のお話を伺った。何もないなか手作りの教材で戦後の教育がスタートした。必ずしもきちんとした教師教育を受けてきた先生ばかりではなかったが、多様な教師集団が創意工夫に満ちた実践をしたと伺っている。今は細かく制度が定められている分、自由度がないように見受けられる。

<自らの体験から>

私も団塊の世代の一人として、戦後の教育を受けてきた。中学校では、卒業間際まで旧兵舎を利用した校舎で授業を受けた。先生のなかには、いわゆるデモシカ教師もいた。組合運動に熱心で、イデオロギー的な言動が目立つ先生もいた。体罰教師も、感情で子どもを叱る先生もいた。ふざけて煙草の火を児童に押し付けるマネをした先生もいた。しかし一方で、本当に熱心な先生も多かった。

小・中・高・大のそれぞれの場面で、私は本当に師恩に恵まれた。東京物理学校出身の熱血教師がいた。東京の私大を出て地方の公立学校の教師として赴任されたばかりではあったが、素晴らしい授業をする新米の先生もいた。皆さん、素晴らしい先生だった。教育学部出身かどうかは全く関係なかった。その人個人の個性であったと感じている。

<小学校の現場で>

さて、自分の子どもが学校教育を受ける段階になって、大いにとまどった。小学校低学年の子どもが、クラスメートの集団のなかで、仲間はずれにされないように怯えて友達づきあいをしているように見えた。異常な状況というほかはない。ただ、それは学校教育が悪いというよりは、そういう社会に日本がなってしまったということだと思っている。社会の状況が校内にも反映しているのだと思う。そして、これは私の子どもが暴力を振るわれたときの実例であるが、普段はどんなによい先生であっても、「これは本人がいじめではないと言っていますから、いじめではありません」と、決していじめの

存在を認めようとしなかった。子どもが学校の教師に告げ口をするようなことを自分から積極的にするはずがない。そのことを教師が知らないことはあり得ないと思っている。

いずれにしても、公立学校にはいじめの存在を認めてはいけないという雰囲気が蔓延しているのだろうか。もし、いじめの存在を認めようとしないのであれば、教師の側にいじめを早期の段階で発見し解決しようとする姿勢が生まれるはずもない。人命にかかわる事態になったとしても「いじめに気がつきませんでした」というほかはない。

これも小学校の低学年での体験である。担任の教師と面談した時のことである。私の子どもが漢字の書き取りが苦手であることが話題になった。そのことで私から、学校でもご指導いただけるようお願いした。しかし、「本人にその気がないから無理でしょうね」という回答だった。私が、このまま漢字を習得しなかったら、この先本人が困ることになりませんか、と言ったら、「そうですね」と一言。こういう教師も学校にはいるのである。もちろん、休日を犠牲にして部活に懸命に取り組む先生もいれば、多くの児童に慕われている先生もいた。卒業後も卒業生が学校に遊びにいたりして交流が続いているということである。

<中学校の現場で>

また、私の知り合いの、ある中学校教師の事例を紹介したい。その教師は、大学生のころから元気過ぎて何かと話題になった。学生結婚しそして離婚するなど人生の激動を経験した。その後に科目等履修生として大学で教職課程を履修し、苦勞して教育実習を終了した。そして念願叶って公立学校の教師として採用され、それまでの人生で遠回りして苦勞した分だけ現場で力量を発揮し、周囲から信頼されていると聞いていた。ところが、そろそろ中堅として活躍するというとき、赴任した学校で事件があった。クラスで問題行動を起こしていた生徒が、その教師の言動についてまったくのデマを親に吹き込んだ。PTAの会長である親が、退職間近の校長に抗議した。校長は、一方的にその教師を厳しく叱責した。クラス内で問題行動を繰り返す生徒への対応が極めて困難になった。そしてある日突然その人は、身体に症状が出て教壇に立てなくなった。事情を知って、我々はできる限りの対応を関係者をお願いしたが、結果として本人は退職せざるを得なかった。その後健康を取り戻したその人は、家業の傍ら、実父の事業をも引き継いで他方面で活躍している。有能で人間味に溢れる人である。それなのに学校現場で仕事を続けられなかった。

これは私が直接見聞したことでなく新聞報道で知った事例であるが、ある中学校の生徒会長の選挙で、学校側が候補者の一方に肩入れしたという。そのことを生徒がどう受け止めたのだろう。今の学校現場で何が起きているのか。

<高等学校の現場で>

次に挙げる事例は、現在もそうであるかどうかはわからないが、都立高等学校のことをいくつか述べてみたい。子どもが高校に入学したときのことである。入学式の後、保護者が教室に集められて説明を受けることになった。担当が入れ替わり立ち代り所管事項について説明する。その間、保護者は休憩時間もなく延々と説明を聞かされることになった。次々と現れる教員は、自分の担当が終わると消えていく。その説明会全体をコーディネートする立場の教員がいないのである。縦割りの業務が蔓延していることを痛感した。我々の普通の感覚からすれば、非常識の極みである。

また、その時に説明に来たひとりの教員の態度には本当にあきれた。白衣とサンダル履きで現れたその教員は、教卓を前にして首から上だけペコッと頭を下げた。この高校では、教員に対して入学式にふさわしい服装を整えることをしつけていないのかと思った。そして、教師としてというよりは一社会人として必要な、お辞儀の仕方を教えることも出来ないのかと絶望した。入学後のクラス別の保護者会にも出席したが、義務的な態度が感じられてならなかった。担任の教員から「学校の外で私に会ったら、そのときは教師の立場ではないから声をかけないように」と言われたと子どもが言っていた。公務員であることと教育者であることは両立しないのだろうかときえ思ってしまう。

当時、都立高校の校長は、当時私が知る限りではほとんど校内にいないということであった。事情があつて埼玉県のある高校を訪れたとき、その高校の校長先生は毎朝校門に立って生徒を迎えているとお話された。都立高校の校長先生の現状をお話するとびっくりしていた。

<開放制教師教育を堅持>

これまで述べてきた私の体験を踏まえて感じることは、学校は社会の縮図であり、学校教育の問題といってもその原因のすべてが必ずしも学校そのものにあるとはいえない。従って、学校の中だけで解決できる問題ばかりではないと思う。もちろん、原因がどこにあろうとも、学校のことは第一義的には学校の教職員が対処すべきであることは当然である。「教育は人にあり」であろうから、個々人の人間性の問題ももちろんあると思う。その上で、学校内の問題を解決できる教師を教育するためには、教師が最初に赴任する学校が、いかに良好な教師集団としての環境を提供できるかが大事であると思う。

平凡な言い方になるが、私は、教師は教師集団のなかでこそ鍛えられるという言葉に信ずる一人である。その言葉を現実のものとするためには何が必要なのか。そのために

こそ、多様な学部で学問的精神を身に付け、人間性を涵養する教師教育を行う開放制教師教育が今後も堅持されるべきだと私は考えている。

現在、学校教育が抱えている問題は、大学の教職課程の履修単位数を増加させるという短絡的な対処で解決の方途が見えてくるとは思えない。履修単位数をどこまで増加させれば学校現場が改善するというのだろうか。また、法令の改正や通達・通知を出すことだけで解決するとも思えない。文部科学省にそのことを強く訴えたい。

<文教行政はまず必要な予算の獲得を>

すでに繰り返し述べているように、学校が社会のなかで孤立して存在するものではない以上、社会全体の風潮と無関係ではいられないし、むしろ強く影響を受ける存在であると思っている。今は、社会全体の道徳的気風や精神性を高めることが求められているのではないだろうか。社会が教育のために何をなすべきかが問われている。

その前提を踏まえ、文教行政として学校教育の前進のためにどうすべきか。私には常識的なことしか言えないが、たとえば教師集団がもっとゆとりを持って子どもと向き合う時間を確保できるよう、必要な人件費を確保することが重要だと思う。文部科学省は当然として、さらに教育学の専門家や学校関係者の皆さんのお力により、今後少人数学級が一段と推進されることを切望する。

<人間教育の原点>

最後に、もう一つだけ事例を紹介したい。ある私立大学では教職課程を履修する学生対象に定期的に現職の教師を講師に招いて講演会を開催している。以前、私もその講演会を傍聴させていただいた。その時の講演会講師の中学校教師は、真摯に生徒に向き合っていて懸命に努力していた。問題を抱える生徒にも徹底して関わりをもち続けた。

しかし、家庭内の問題という、学校関係者として立ち入ることができない部分で生徒が極めて困難な状況に陥ってしまった。その時、その教師はどうしたのか。「私には、ただ祈ることしかできませんでした。」と語った。その言葉を私は忘れない。万策尽きて、天を仰いでただただ生徒の幸せを祈る、その祈り。これこそ人間教育の原点であろう。

その祈りは、過酷な教育現場で子どもの可能性を信じぬくということと一体の精神的営為ではないか。その祈りを胸に抱く教師を育てる場もまた学校現場だと信ずる。開放制教師教育がその人間教育の推進力になることを信じ期待する。 (2014. 04. 23)